

## 追悼

### 清水信氏を偲ぶ



文芸評論の大御所、清水信氏（鈴鹿）が2月7日亡くなった（享年96歳）。映画にも造詣が深く、小誌「シネマ游人」発行に際しても温かい支援をいただいていた。ご冥福をお祈りしたい。ここでは故人と交流のあった、お二人に生前の清水氏を偲んでいた。

### 回想いくつつか

藤田明 映画評論家

清水信さんの訃報、Xデー来たるという感だった。数項目、振り返っておきたい。

- ① 月一回、鈴鹿の旧宅で土曜会。女性参加などありえない1960年代、その辺が氏との最初だったろうか。文学談義が主ながら映画にも時には及んで親近感をまず持った。
- ② 大学を出て東宝へ入り、文化映画部門、亀井文夫に就いた、と耳にできたのは後のこと。亀井が検挙された為、北京大使館付きに転ずる。仕事の一つは映画館の上の階から、中国人観客の動静監視。そうと知ったのは、さらに後。民衆の姿に日々接したと解せよう。
- ③ 亀井、北京体験が戦後の同人誌評につながって行く。反骨と雑草

重視。大学人の著作やおカミの金の付いた刊行物を嫌った。雑草的な草の根の文学活動への目。朝日「展望・三重の文芸」16年近くを担当しながら氏からの影響も実はあったことなるうか。

④ 昨年12月18日、県立図書館・文学コーナー展示とかかわるトークへ招いたのが氏との最後になった。映画関連をもっと知りたかったし、少しでも書き残してほしかったと思う。

### 二足のわらじ

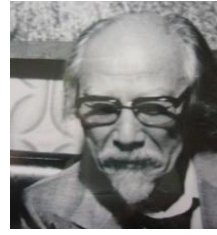
吉村英夫 映画評論家

清水信さんによって、私は映画研究に生涯をかける決心をした。一九八一年、最初の著作『男はつらいよの世界』を上梓したが、清水さんからはじめて電話をもらった。「寅さん論は好著である……」。あとは舞い上がって覚えていない。

「映画研究と教職」の「二足のわらじ」を履くべしと納得させてもらったのも清水さんである。私には二人の「師」があり、もう一人は、「文学も映画も社会的活動」もみんなやればよいと論しを受けたのが紅野敏郎教授である。お二人の教えがなければ今の私はない。もうひとつ。私は教員組合運動に関わったことがあり、三重県教組鈴亀支部の委員長清水信を知っていた。「不当な政治権力から子供を守るために教員は団結すべし。敵前分裂はいけない！」。組合大会での熱弁を聴いて、ここでも「教え子を戦場に送らない」、「真に生きるとは」を学んだ。清水さんから有形無形の教えを受けた人は多いだろうと思う時、清水さんの大きさを改めて噛みしめるのである。

## 鈴木清順監督を偲ぶ

林久登 スタッフ



映画界の長老鈴木清順監督が2月13日亡くなった（享年93歳）。唯我独尊を貫き、独自の美学を作り上げた剛胆監督だった。その彼が、20年ほど前に、四日市に来ているのを知る人は少ないだろう。拙著「映画監督藤田敏八」にその模様を書いている。そのまま転記し、追悼としたい。

### 在りし日の清順監督

1998年夏、地元出身の藤田敏八（以下敏八と呼ぶ）の一周忌の法要に併せて、四日市文化会館で、敏八を偲ぶ映画会を企画した。この日は、生前の敏八の交友の広さを物語るように、東京から多くの映画人が駆けつけてくれた。桃井章（かおりの実兄）、荒井晴彦、岡田裕、奥田瑛二、蔵原惟繕、根岸吉太郎、原田芳雄、それに作家の連城三紀彦らが、ぞくぞくと来四し、市、はじまって以来の豪華ゲストの揃踏みとなった。

その日、開演前のロビーで女の子たちがキヤーカー騒いでいるので、何事かと近づいてみると、輪の中に白髭の仙人風の老人がいる。なんと鈴木清順監督（以下清順と呼ぶ）ではないか。高齢なのであえて声をかけていなかったのに、わざわざ東京から、しかも自腹で、来てくれたのだ。以前、敏八の関連で会った時に、「元気でしたら、一度四日市へ遊びに来て下さいよ」といったら「俺は、元気

じゃねーよ」と言って、ニヤーと笑った顔が印象に残っていた。だが、彼はこの日を忘れていなかったのだ。せっかくだから、他のゲストと一緒に、追悼トークに出てくれるよう頼むも、軽く断られた。そして、開演してから会場で紹介だけでもしようとする、いつの間にか姿を消していた。風のような人だった。彼は10歳近く年下の敏八が、自分より先に逝くとは、思いもなかったことだろう。

この2人が、映画界の話題をさらったのは、80年の『ツイゴイネルワイゼン』だった。敏八は、はじめて本格的な役者として清順のオフアーに応え、西欧かぶれの知識人を怪演している。清順はその後、敏八監督作品『ダブルベッド』に役者として、吉行和子と友情出演している。この時の2人の「ライオンのセックス談義」は愉快だった。

『ツイゴイネルワイゼン』撮影時の2人の写真のデッサンを（後藤邦夫氏・画）巻頭に掲げた。清順監督に捧げたい。

映画を媒体にして、遊び、主張し、挑戦し合った鬼才2人。あれから20年が経ち、長寿を全うした清順は、旧日活のアンカーとして、一足先に逝った蔵原、連城、原田の後を追うように、敏八の待つ世界へ旅立っていった。合掌。